

## 空に真赤な

空に真赤な雲のいろ  
 玻璃に真赤な酒の色

なんでこの身が悲しかろ

空に真赤な雲のいろ―

岩高生だった私は、盛岡の上田にある実家の縁側に座って、この歌を呟いていたのを覚えていた。べつになにか情熱があるわけでもない、漠然とした当時流行の少年だった私は、父の書斎にあった本をめくっているうちに、それこそ「なんとなく」覚えてしまったのだろうか。

実家の縁側から望む夕陽は、三軒ほど先にある大きな栗の樹に赤く映える。漠然とした将来を仰ぐ少年が見つめる栗の樹と空の色は、まさに白秋の単純で刹那的な言葉となったのだった。

岩高生の頃にもう一つ真赤な空の色を見た。高校三年の春、まだ肌寒い雨が降る夜のことである。

もう寝る時間だったと思う。部屋の電気を

## 福士 俊哉（新30回生）

消すと、外が薄ぼんやりと桃色に見えた。素朴に、なんだろう、とカーテンを開けて外を見ると、空が赤かったのだ。

「火事だ！」正確には「異常だ！」という直感で、私はすぐに山田線の陸橋の上に行ってみた。

風に煽られた炎は何メートルであろうか、火の粉を舞い上げて空に立ち昇っていた。炎の赤は低い雨雲に反射し、あたり一面に桃色を放っていたのである。

「岩高が燃えている…」

私はどうしていいか分からないままに陸橋を降りて走った。愛校精神など欠片（かけら）ほどもない今時の少年はそのとき、何故か隣にあった河北小学校が燃えていれればいいな、と願ったりしていた。

だが、岩手高校は燃えていた。近所に住んでいた岩高の生徒たちは、何かしなければと、動き回っていた。気丈な生徒や、卒業生なのか、大人たちが燃え盛る炎のなかで、机のひ

とつでも運びだそうとしていた。その中に旧一六回生だった父の姿があった。非情な気がした。私はただ固唾を飲んでいた。

私のその姿は翌日の岩手日報に載った。

見出しは「呆然とする生徒たち」。私は写真の真中に写っていた。それを見た祖母は、「俊哉は背が低い」と言った。

現在、私は海外に出かけることが多い。映画のシナリオを書いたり、テレビの演出をしている仕事柄、様々な国をまわって撮影する機会があるのだ。夕陽の撮影は、エンディングに必要不可欠な、いわば映像業界のオキマリというものになっている。

数年前、私はイスラエルに行った。パレスチナが建国するとかしないとか、確かずいぶんややこしい番組を作っていたのだが、聖地エルサレムから当時解放地区になる予定のエリアをまわり、テルアビブでエンディング用の地中海に沈む夕陽を撮影していた。地中海に溶けるような夕陽、などと言えば美しいのだが、それは平凡な夕陽だった。だがその時、何故かあの歌を思い出したのだ。私は一緒にいたカメラマンに言った。

「空に真つ赤な雲の色…って知ってるか？」

「は、なんスカそれ？」

「確か北原白秋の詩だったと思うけど……歌にもなってるサ。昔、大正の頃の歌かな……」

カメラマンという職業には職人的な気質の人間が多い。彼はうんざりとした様子で言った。

「福士さん、趣味なんスか？ ブンガク」

「いや、べつに……」

撮影現場は忙しく、いつも分刻みのスケジュール

ルとの戦いになる。情緒を楽しむ暇はなく、そのまま私たちは空港へと移動した。

エルサレムは二千年にわたって民族が権利を争い続けた聖地である。その凄まじい生のエネルギーの跡は城内にしっかりと刻まれてあり、遙か島国の日本から訪れた私は、その圧倒的なアイデンティティに感服していた。別にこの身の小ささをはかなんだ訳ではない

が、テルアビブの海に辿りついた私は、何となくあの一七才の少年のような気分になっていたのである。

今の岩高生はどんな夕陽を見ているのだろうか？ 出来れば、自分にしかない夕陽を見て欲しいものだ。日は昇り沈むのだが、やはり昇るのだ。それは世界のどこでも、いつでも見ることができるとのだから。